

NPO JCP NEWS

No. 19 · 2009. 3.30

- ・「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」始まる
- ・伏流水 日本における人材養成の現場から 筑波大学
- ・会員の声 台湾の「発掘された土器陶磁器修復の国際シンポジウム」に参加しました
- ・サテライト・レポート／ちょっと一服
- ・書籍紹介 『繊維判定用 和紙見本帳』
- ・JCP事務局通信



「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」講義風景



筑波大学キャンパス

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」始まる

平成20年8月、東京国立博物館との共催により、「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」第1期を開講しました。

このセミナーは、JCPとしては初めての本格的な人材養成セミナーです。東京国立博物館 学芸研究部保存修復課長 神庭信幸先生のご協力と、(財)文化財保護・芸術研究助成財団の助成を得、同博物館の小講堂ならびに展示会場などを使用させて頂くという理想的な環境の下で、10日間の開講が実現したものです。

今回は初めての試みということもあり、広報を始めたの

が6月後半に入ってからというスロースタートであったにも関わらず、当初の定員20名を大きく上回る応募を頂きました。急遽定員枠を30名に拡大いたしましたが、それでも半数近くをお断りせざるを得ない状況となりました。最終的には今後受講の機会が少ないと想われる方から順番に決定させていただきましたが、その結果、学部生と大学院1年生が殆ど選考に漏れてしまったことは、大変申し訳ないませんでした。

今号では、セミナーに参加された受講生の中から、それぞれ違うお立場の3名に寄稿をお願いいたしました。

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」に参加して

加藤 里英

「文化財保存修復専門家実践セミナー」とは、NPO JCPと東京国立博物館との共催で行われたセミナーで、1コマ3時間、1日2コマの講義を2週間受け、2年履修することで修了証が発行されます。1年目は2008年8月3日から14日まで行われました。国内外で活躍できる高度な能力を持つ文化財保存の専門家を育成することが目的です。

私は美術館で働いていますが、業務内容は美術館が所有する作品のドキュメンテーションです。もともと美術史専攻で、専門的な保存科学の知識を持ち合わせていません。しかし、保存担当の学芸から美術品の保存に関する知識を少しかじっていたので、保存科学に興味を持っていました。ちょうどそのタイミングでこのセミナーの開催を知り応募しました。

1年目のセミナーは、文化財保存に関して原子レベルのミクロ的視点から文化財を取り巻く世界を含むマクロ的視野までを総合的に学びました。大まかな内容としては、

- ・文化財の劣化に関する科学的・物理学的な基本的知識。
- ・展示・管理する段階では、保存に関する注意点や適した温湿度、作品の劣化要因に関する知識。
- ・修理する際は作品の調査診断方法・修理計画の立て方、さらに修理哲学に関する示唆。

東洋画・洋画・染色・陶磁器・石材・壁画・金属・考古等、それぞれ文化財の形態に即した講義も含みますし、科目には日本画の模写の実技や世界遺産の制度の歴史なども含まれます。セミナーでは色々な側面から文化財保存に関してアプローチするのですが、高校を卒業して以来、化学および物理科目とは縁遠い生活をしていたので、面食らつ

た科目もあったことを正直に申告しておきます。

「実際、授業を受けてみて思ったのは、講師の先生方は超一流の先生方。すごく刺激を受けた。だって、目の前にそれぞれの世界のトップランナーが、こちらに向かって真摯に語りかけて下さる。この想いに応えるのは大変だ！」これは東京での最後の夜、8月13日付けの私の日記の抜粋です。

受講生は主に院生や、文化財の保存に携わる社会人でした。2週間、朝から夕方まで博物館にこもり、文化財保存を学び取ろうとする仲間たちが御縁あって集まっています。受講生の皆さんとお知り合いになれたのもひとつの財産です。

先日、愛知県美術館で行われた近現代日本画の調査のお手伝いをしていたとき、セミナー受講生であるということで1点だけNPO JCPの先生方の指導の下、作品の形式や保存状態等の調査をさせて頂きました。ちょっとしたこともかもしれません、セミナーに参加することでそんなチャンスがめぐってくることもあります。

文化財保存修復専門家実践セミナーへは、地方からの参加なので宿泊費等の費用も含め出費が大きく、お財布事情は大変なのですが、それでもセミナー2年目に参加することを楽しみにしています。



藤原先生による石材の講義

「専門分野の垣根を越えたつながり」

久利元昭（有限会社資料保存器材）

昨年の8月3日～8月14日にかけて、上野の東京国立博物館で行われた「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」には、文化財について勉強している学生から、現場で仕事に携わる保存修復技術者まで、分野も経験も様々な約30名の受講者が顔をそろえた。今回、私は受講者の一人として、また企業で保存修復に携わる立場から、セミナーの受講を通して感じたことについて述べたい。

九州国立博物館長の三輪嘉六先生の文化財保護に関するお話から始まった講義は、いずれも1人3時間という短い講義時間の中で、できるだけ沢山のことを伝えたいという講師陣の熱意が詰まつたものばかりであった。例えば東北歴史博物館の及川規先生による空気汚染の講義は、同館における空気汚染の問題について膨大な調査データのスライドや、実際に使用した調査機器を提示しながら、汚染の原因や具体的な対処法を話されるという、非常に充実した内容であった。また染織品修復家である石井美恵先生は、ご自身が处置された修復事例や、染織品において試みられている新たなマウント法などを紹介されると共に、有機染料と酸、アルカリの反応に関する簡単な実験も行うなど、非常に実践的な講義であった。

さらに東京国立博物館という場所を、最大限に利用した講義もいくつか行われた。同館学芸研究部保存修復課長の神庭信幸先生の講義では、博物館が抱える保存と展示という問題について、展示室を巡り東博で行っている対策を見ながらお話を頂いたことで、今まで文化財がどのように守られ、そして活かされてきたのか、といったことを現実的に受け止めることができた。また、同じく東博保存修復支援技術者の鈴木晴彦先生の講義でも、仕事場である東博内の修理室を見学し、様々な保存処置の実施例について解説頂いたことで、文化財を守るうえでの予防的な保存という考え方の大切さを改めて実感した。このように学んだ理論をすぐに体感できるということが本セミナーの大きな特徴の一つであり、多種多様な文化財を所蔵し、自館に修理室を構えている東博だからこそ実現した内容であろう。

本セミナーのもうひとつの特徴として挙げたいのが、講師と受講者が話し合える機会が多く設けられていたということである。各分野の第一線で活躍されている専門家の方々に、自分が仕事の中で感じた疑問などについて直接お話を伺うことが出来たのは僥倖だった。また、これは受講者同士でも言えることだが、普段あまり関わりのない分野の人たちと話し合い、互いの共通点や相違点などを感じることができたのも、本セミナーに参加した成果と言えるだろう。こういった異分野間でのコミュニケーションは互いに刺激となる部分が多く、またここでできたつながりが今後の協力関係に結びつくこともありうる。今回のセミナー受講者は保存修復技術者やそれを志している人が多かった



繭山先生による陶磁器の講義

が、そういう人材に限らず、文化財を取り巻くあらゆる業種を対象にこのようなセミナーが実施されれば、文化財全体の保存と修復分野の更なる発展にもつながるのではないかと思う。

私のセミナー報告は以上であるが、この「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」は2ヵ年計画であり、今年もまた同じ受講者を対象に新たな講義が行われることである。その具体的なカリキュラムなどは未定だが、一層充実した内容になることを期待し、私たち受講生もそれに応えるべく奮起したい。

最後に、このようなまたとない機会を与えて下さった講師の皆様とNPO JCPスタッフの皆様に、心より御礼を申し上げます。

玉の中に紛れ込んだ石、として

中谷可奈

「次の授業はそんなに興味がないです」そう言うと、隣の人は「私は、とても楽しみ」とにっこりした。普段、専門家として仕事をしているので、仕事でできないような内容は楽しみ、と。はっとした。セミナーの授業は広範囲に渡る。講師の先生方もいろいろなところからおいでだ。この先生方から短期間に連続して授業を受ける機会は、他では見つからないだろう。いろんな講義が一つのセミナーの中に入っている。まるで特別講義の福袋のようだ。だから受けてお得な反面、自分の必要としていない授業が入っているのも仕方ない……と思っていたのだが。

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」という名前からは、保存や修復の専門技術をどんどん訓練するようなイメージを受ける。しかし実際には、文化財保存修復に携わる人は知っているべきだなあ、というようなことを分野ごとに教えてくれるものになっていた。「文化財」が一種類ではないから保存修復のための分野も多岐にわたる。ひとコマ3時間の講義を午前と午後2コマずつ、10日間受けた。それで、何か文化財を保存したり修復したりできるよう

なったかというと、なっていない。講義だけでお医者さんになるのが無理なのと一緒にだ。それなら何をしたのか。

セミナーに来て、文化財保存と修復の分野が、こんなに広くて深いことを改めて知った。公園の木立から、大きな森に来て圧倒される気分。名前は知っていたような事柄でも、詳しい内容はどこまでも深い。博物館環境を整えると聞いて、除湿機の水を捨てる当番体制を考えたことはなかった。土器の接合に、セメダイン以外の接着剤を思い浮かべたこともなかった。日本画の保存のために模写をやってみるのは初体験だ。タペストリーを丸洗いするプールも知らなかっただし、貴重な古書がオートクチュールの箱を着て保管されているのも初めて見た。数え上げればキリがない。芋づる式に知識が関連している。余りに広くてどう振舞つていいのか分からぬ。文化財を保存修復するというのは、たいそう大きな仕事じゃないか？ しかも職業にするのは難しいという。自分にできることなんかあるだろうか。いや、ないのでは！ と混乱した。

保存や修復の研究分野も専門的な実践の道も、たくさん枝分かれしている。それなら一つの専門だけ見ていればいいのかも……と思うがそうはいかない。文化財が、たくさんの分野の技術や知識を要求する、と再確認したところだ。ということは、何かの専門を持っているのは前提だ。そのうえさらに、他の関連の分野を知っていないと困る。

このセミナーはつまり、「ほとんど素人から専門家を養成するセミナー」ではなくて、「文化財保存修復専門家が、さらにグレードアップするための実践セミナー」だったのだ。だから養成も、個別の専門分野を伸張するものではない。個別には、プロの皆さんが自分の専門分野で日々実践

講師名および講義名

(平成20年度)

講 師 名	講 義 名
三輪 嘉六 先生	特別講義 「文化財を護る」
和田 浩 先生	環境保全概論 「温・湿度を把握する。評価する。改善する。」
大河原典子 先生	調査診断法 「模写・模造について」
二宮 修治 先生	調査診断法 「無機分析」
山領 まり 先生	基礎修理設計 「油彩画」
石井 美恵 先生	基礎修理設計 「染織品の修理設計」
神庭 信幸 先生	環境保全概論 「光環境と文化財への影響」
半田 昌規 先生	基礎修理設計 「文化財としての東洋絵画の基本修理設計」
及川 規 先生	環境保全概論 「空気汚染の管理」
藤原 徹 先生	基礎修理設計 「石 材」
繭山 隆司 先生	基礎修理設計 「陶 磁」
沢田 正昭 先生	特別講義 「壁画の保存と活用」
松井 敏也 先生	調査診断法 「光学調査の利用法」
石原 道知 先生	基礎修理設計 「考 古」
鈴木 晴彦 先生	特別講義 「対症修理—総合医療的な保存処置を考える—」
桐野 文良 先生	基礎材料論 「金属材料学の基礎」
稻葉 政満 先生	基礎材料論 「紙・布」
西浦 忠輝 先生	特別講義 「文化遺産とは何か—未来に生かす文化遺産—」
西浦 忠輝 先生	特別講義 「日本による文化遺産保護国際協力事業の現状と問題点」

し、向上させておられるからだろう。そう思って見回せば、すでに現場で活躍中の保存修復関係者、美術品や工芸品の修復を専攻している院生など、プロかセミプロな人ばかりが参加している。



大河原先生による模写の講義

セミナーは、別々の得意分野を持った人々が、他分野の知識に触れて研鑽し、互いに一つの場で出会う機会だったわけだ。知り合った人々が連関された知識で、多様な分野からのアプローチが求められる文化財の保存修復に、今後より効果的に当たれるように。参加してから気付き、大してとりえもない自分で冷や汗をかく。

二週間継続されるプログラムのありがたさで、毎日顔をあわせているうちに、文化財修復の専門家人、絵画修復の専攻をしている人、留学生の人など、普段知り合うことのできない人たちと知り合えた。それでもやはり、出会いの機会を生かしきれた自信はない。

技術も専門知識も未熟以下だが、セミナーを生かしたい思いは強い。セミナーは授業を受けることが主だ。けれど、せっかく多彩な人たちがいるのだ。セミナーの中で、実際の文化財や遺跡などを保存修復するようなプロジェクトを、受講生のみなさんと一緒に実践できたらなあ、と夢見たりする。だから、このセミナーが修了と同時に「解散、終わり！」となるのが惜しい。文化財保存修復にまつわる、何かに発展できないだろうか。

とにかく、「『文化財保存修復専門家養成実践セミナー』が2年連続でありがたい。次はもっと皆さんと交流したい。玉石混交という言葉があるが、ここでは自分は明らかに紛れ込んだ石だ。磨けば光る原石だったらいいが、そういういえば詐欺になる気がする。しかしがんばれば、誰かの砥石くらいにはなるかもしれない。どうぞ次回も、よろしくお願ひいたします。

セミナー実行委員会より

本セミナーは、年間10日間のカリキュラムを2カ年連続受講して、ひとつのレベルを修了します。

平成21年度は好評にお答えし、年間2回のセミナーを開講いたします（第1期2年目のセミナー：平成20年度受講者対象。募集は若干名／第2期1年目のセミナー：20年度開講と同内容のプログラム：受講生は新たに募集）。

現在日程を調整中ですが、決定次第広報いたしますので、20年度に受講できなかった方は是非リベンジしてください。

第Ⅳ弾

筑波大学

筑波大学大学院人間総合科学研究科
世界遺産専攻

伏流水ではこれまで、学部から文化財系のコースを持つ大学を取り上げてきましたが、今回は大学院から文化財系のコースを設置している筑波大学を紹介します。

筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻は、日本で初めて世界遺産に関する学問を専門的に学ぶことができるコースとして、2004年に設立されました。世界遺産専攻は世界遺産制度や遺産の評価・分析、保存科学、遺産マネジメントといった遺産の保護と活用に関わる多様な専門性をとおして、様々な側面から世界遺産を学ぶことができる、これまでにない新しい学問分野の確立を目指した専攻です。

世界遺産専攻に入学後はまず、自分の専門に関わらず、必修科目で世界遺産制度、遺産保存の意義、保存への考え方、共同研究の実施をとおして、遺産保護研究の基礎について学習します。その後、選択科目の中からそれぞれの専門研究に即した授業を履修します。選択科目は、文化財学の思想や遺産保護制度、自然保護や美術、考古、建築、景観保存、保存科学による分析・評価に関わる基本的講義科目から、遺産保護の国際協力や遺産マネジメント、観光や市民参加など社会的役割・活用に関わる講義で構成され、さらに保存現場やフィールド活動を中心に演習科目で



筑波大学大学院

インタビュアー：小川 紗子（東京学芸大学大学院）

下村香代子（筑波大学大学院）

神田 涼（筑波大学大学院）

文 章 構 成：小川紗子

実践的能力を養成します。また遺産保護や活用の現場で研修を行うインターンも実施しており、高度職業人として活躍する専門能力の修得に重点をおいています。これらから最終的に30単位を取得し、修士論文を作成することで、修士（世界遺産学）、修士（学術）を取得することができます。さらに2008年からはドイツ連邦共和国のブランデンブルク工科大学コットブス世界遺産専攻と交流が始まり、交換留学制度を利用して留学生交流が行われています。

肌寒さが残る中、桜が満開の筑波大学で、保存科学がご専門の松井敏也先生にお話を伺いました。

設立経緯とコース概要

——『世界遺産専攻』という、日本で初めてのコースですが、どのような経緯で設立に至ったのでしょうか？

松井先生：流れというのかな、『世界遺産』というものの自体がちょっとブームになってきた兆しもあったし、世界遺産を専門に教える大学というのが日本になかった、というのも一つあります。文化庁のほうでもそういうものを作りたい、という意志があったように聞いていますので、その経緯で文化庁や東文研の先生方が非常勤講師としてやってくださるという、他の学校と違うシステムもでき上がったのだと思います。

専任は、文化財学、国際協力、マネジメント、観光、美学、美術史、保存科学、建築、景観を専門とする9人の教員が担当しています。その他に学内外で協力して授業を担当していただいているのが、関連する自然保護、社会工学、歴史、考古学、地質学や宗教学の先生方などと、文化庁の先生を合わせて、授業全体で教えているスタッフは20名ぐらいです。

博士前期課程は『世界遺産専攻』、博士後期課程の方は『世界文化遺産学専攻』です。博士前期課程では、文化遺産や自然遺産、無形遺産など様々な修士研究が行われていますが、博士後期課程は文化遺産を中心に博士研究が進められています。

修了後は、国・地方公務員、遺産保護事務所、博物館、海外協力関係の専門機関や民間会社、海外青年協力隊、マスコミ、遺産活用のNPOなど幅広い業種で修了生が活躍しています。

——『世界遺産専攻』は大学院からの設置ですが、2年間のカリキュラムというはどのようにになっているのでしょうか。

松井先生：どうしても一年目というのは教養の部分になってしまう。これからやろうとしていることに必要な情報を一年間で詰め込む、という感じで、一年目というのは自分の研究はあまりできずに授業が中心になってしまふ。でもそうしないと、文化財全般についてを広く学ぶことができないんです。授業では、例えば今年は環境や、石、土をやりたい学生が多いのであれば、それを中心にやる、というように学生の希望に合わせて対応しています。保存や修復の分野というのは、基本的な考え方は同じで、材質の違いはアプローチの仕方が違うということなので、そういうことを教えられたらしいと思うんですけどね。

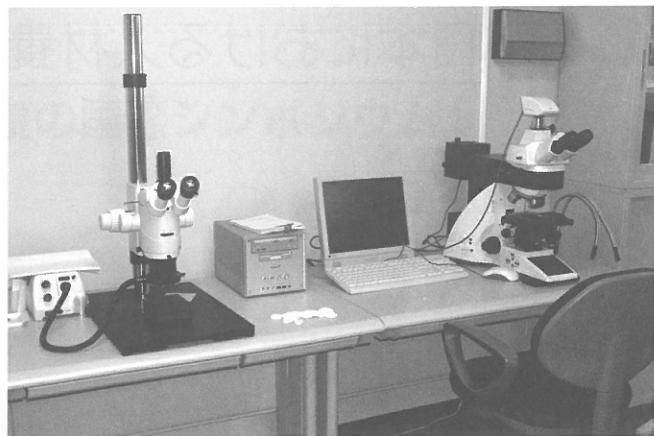
バラエティ豊かな教授陣

松井先生：世界遺産専攻のスタッフといつても、世界遺産の専門家というのはいないんです。バラエティのある先生を集めて、それぞれの先生の学び方や文化財に対する姿勢から、世界遺産の色々な側面を見ることができる。このカリキュラムならこういうものも世界遺産に必要だ、となつて建築も哲学もある。十分とは言えませんが、最低限世界遺産を学ぶために必要なスタッフをそろえているとは思います。他の大学では、文化財の保存として整備、建築、民俗くらいが今あるところで、街造りや景観など、そういう部分の運用に関しては、非常勤で来てもらっていて、メインスタッフがそこにはいないことが多いですね。ここはそういうスタッフが中にいてやっているんです。

様々な分野から先生が集まつていらっしゃることで、幅広い考え方を身につけることができる環境があるようです。

下村さん：先生方全員と修士1年生全員で行う授業があって、そのときに先生方でも意見交換されたりして、同じものを見ていても考え方方が全然違うんだ、というのを知ることができます。一つのことを考えるときに、自分の見ていた方向以外から見たらどうなるか、というのを常に意識する場がある、というのがすごくよいですね。修論の中間発表、本発表の段階でも先生方から質問を受ける機会があって、そのときに論文で自分が言っていることがくつがえるんじゃないかな、というくらいの意見を言われたりもすることがあるんです。

松井先生：一人の先生や似たような先生ばかりという指導では、外から評価をされるときに耐えられないんですね。一つのことを深めていく場合はそれが必要なのですが。その点、ここは本当に色々な先生がいて、先生同士でも意見交換が盛んです。先生方も一緒に現場を見に行って意見を交わして、見方が違うな、とか、そういうところを見るんだ、とかこういうところを大事だと思っているんだ、とかね。それが面白いですね。



実験室

でも皆文化財を残したい、という気持ちは一緒なので、議論になっても後でちゃんと考えてまた話し合いを重ねていく。その辺はいいスタッフかなと思いますね。

下村さん：学生同士でも、授業などで全然違う立場の学生がみんな同じテーマで話しているのに、持っているバックボーンが違うから発表も全く違っていて、その中で意見をすり合わせたり一つの考えにしていく過程が面白かったですね。そういうのは、この学校に来て色々人と話す良い機会があったなあと思います。

博士課程前期1年の学生にお話を伺いました。

——なぜ筑波大学で保存科学を学ぼうと思ったのですか？

学生：一度他の大学を見学しに行ったんですが、ここにきたらこちらの方が自由そうだったので。テーマは、最初は分析などがやりたくて、というかそれくらいしか想像できなくて入ったんですが、世界遺産という様に、ボーダーレスというかすごく広くて、いろいろ話を聞いているうちに、分析だけではないのかな、という様に興味が広がりました。

——授業はどのような感じですか？

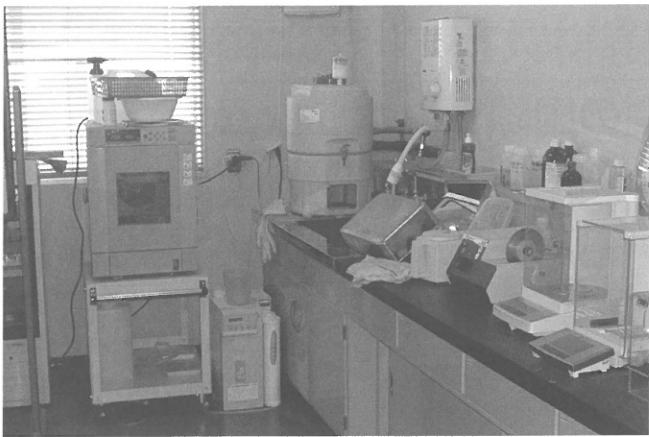
学生：見学などに行く機会が多くて、それが刺激になりました。1年生のうちは外に出ることが多くて、必修の授業も見学などが多いです。マネージメントの方で町並み保存などに関わっていらっしゃる先生が多いから、実際の現場の話を聞く機会が多いですね。授業も先生方がやってきたことなど、事例を取り上げたものやフィールドワークが多いです。

地域・現場への貢献を目指して

——さまざまな分野で連携して研究をするような活動はあるのでしょうか。

松井先生：今、富岡製糸場を建築の先生と一緒にやっています。

富岡にもその先生の学生とうちの学生とで一緒に下見に行きました。地域の文化財に関するワークショップを観光の先生と僕と研究員とで開催したり。例えば県内の各地区に、考古学協会とか、県政の文化財に関する連絡会とか、



実験室

色々な団体があって、催し物や研修授業を一緒になってやったりとか。自治体の方が案件を持ってきて相談や処理をしたり、現場へ行って処置するなど、市町村と個人で付き合いがあることが多くて、そこに学生さん達が入ることもあります。

——現場へ行って空気を感じるのが一番勉強になりますよね。
松井先生：世界遺産と言っているけれども、守っているのは一番現場の近くにいる人、市町村などの人なんですね。実際世界遺産も担当になって頑張っている人が多くて、そういう人たちに負担がいくんですね。その人たちと普段から付き合って、その人たちの仕事のリズムや、やり方が分かっていないと、一緒に仕事できないよね。どんな仕事の人も一緒だと思いますが、現場に行って呼吸を合わせることが大事ですね。学生にはできるだけそういうところに触れてもらいたいと思います。ただ、最初に何かを言って、それでこの仕事はこうだ、というふうにレールを敷くことはしたくないんです。

下村さん：私が感じているのは、必ずしも自分が興味を持っていることに関して、現場があるかどうかということが分からぬところがありますよね。ここの学生は、先生がやっていらっしゃることと違うことを全員がやってたりするので、現場を自分で探したりするのが大変です。

松井先生：学生には理想論で終って欲しくない、と思っています。現実に現場があるわけで、いくら言葉を重ねても、その言葉やプランがいかに優れたものであっても、それが適応できない、それが文化財を残せないのであれば、それはやはりよくないんですよね。現場へどうもって行くか、というアプローチを考えて欲しいと強く僕は思っています。核心をつく部分までチャレンジしていく、というのかな。例えば現場のアンケート調査について言えば、アンケートをとることはできる、じゃあその結果をどうしていくか？ ということです。例えばどこかにヒアリングを行って話すと、知りたいことが分かって自分のためにはもちろんなるけれど、話した結果を自分だけのものにするのではなく、じゃあその人には何をしてあげられるのか？ 何を返せるのか？ そこを絶えず意識していかないと独り善

がりになってしまいます。向こうの人からもらった以上のことをちゃんと返そうという意識が必要なのです。

松井先生は学生だけでなく、現場の方々のステップアップにも積極的に関わっていらっしゃるのですね。

松井先生：今、世界遺産専攻では、『地域再生と観光戦略プロジェクト』、『社会人学び直しプロジェクト』、『平和戦略のための世界遺産ガバナンス』という3つくらいのプログラムを持っています。そういうものを通じて、学生だけではなく、地域や専門領域に入っている方々をもう一回、僕らが提供する研修プログラムや事業に参加してもらって、さらに高度な職業人、専門職業人としてのスキルを持ってもらいたい、と思っています。それぞれの専門はもう持っているからいい、現場経験もある。でもそれだけでは、今後日本が世界遺産や文化遺産を活用していくときに、各自治体とか地方で行き詰まっている感じがある。例えば文化と観光は結びつきつつあるけれど、今後もっと違うことができるのかもしれない。アイディアを持ってきて、その土地土地で風土に合わせてやってくれたらいいなと思います。そういう学生を育てたり、地域への貢献をしていきたい、と思って仕事をしています。

現場で活躍できる人材を

——今年5年目※を迎えて、一つの節目を迎えたと思うのですが、今後どのような学生を育てていきたいか、という今後の展望をお聞かせください。

松井先生：世界遺産は今日本に14あります。そしてその下に、富岡製糸場や長崎の教会・キリスト教遺跡など暫定リストに載っているものがあって、さらにその下にも候補があるわけですね。そういう文化遺産、世界遺産というのは盛り上がっているけれど、建築とか観光とか今までの枠組みで、縦割りで別々にやっていることが多い。それぞれの仕事や役割を理解できて、マスタープランを作れるような人を育てられたらいいと思います。例えばこういう大学で保存科学を学んだとしても、建築とか哲學的なことなどを学べているような。保存科学しか知らない、とか修復だけやりたい、というようなことではない。今までではそれで来たけれど、これから文化財の保存は、次のステップへ行かなければいけないと思っています。ここはそういう総合的なことを学べるので、体制をもっとしっかりさせてレベルアップしていきたいですね。

——ありがとうございました。

※この取材は平成20年3月31日に行ったものです。

カリキュラム、教授陣の構成内容は平成21年度のものを反映しています。

取材に当たった小川さん、下村さんはすでに大学院を修了しています。

台湾の「発掘された土器陶磁器修復の国際シンポジウム」に参加しました

昨年の秋、行政院文化資産総管理處籌備處と国立臺南藝術大学での「出土（水）土器陶磁器保存修復国際シンポジウム」で縄文土器の修復について講演してきました。日本からは私と府中工房の堀江武史氏が招待されました。私が縄文土器の見どころを紹介し、堀江氏が主に技術的な部分を詳しく説明しました。私の講演内容は縄文中期の土器「火焔土器の時代」の修復にあたっての問題点、この時代の土器文様の展開を現代美術の特にシュルレアリスムのオートマチック手法と比較した話。堀江氏は縄文土器の修復事例や、出土品活用として実験的試みの展示「現代美術と縄文土器」などについて紹介してきました。

台湾と日本の相違点

技術的にはほとんど同じだと感じました。道具も材料もいつも見ている「なじみの物」たちで、この点では同じ仕事をしている同士で言葉の壁はありませんでした。今回のシンポジウムでお会いした多くの方々と強い共感が得られる良い出会いの旅でした。台湾の人のみならずイギリス人のGordon Turner-Walker氏とも交流しましたが2晩ビールをたくさんご馳走になり本当にありがたいやら申し訳ないやら感謝の念でいっぱいです。

技術面ではほとんど同じだと感じましたが修復方針については違っていました。土器は考古学的調査「発掘」で出土されます。完全な形で遺存していることは稀なことです。破片のみの場合が多数です。我が国ではそのような破片が全国の学校の空き教室などにパン箱に入れられてうず高く積まれている現状があります。そしてかなり無理な復元をしている事例が見受けられます。復元部分の方が本物よりも多いような物です。しかも復元部分を本物そっくりに似せているので、どこまで本物なのか分からぬ資料も多数見かけます。あるいは似せるつもりでなくても復元材料が土器を汚し、どこからどこまで本物なのか判断付かないようなものまであります。

台湾の修復では、遺存率50%以下は復元しないとはっきりした原則を打ち出しています。しかも過剰な復元を避けオリジナル部分の判別を分かりやすくするというのが原則です。

台湾の考古資料の修復は行政がすべて行っていて私のような民間業者はまだ存在しません。出土品の保管場所を見学しましたが土器の出土量が日本ほど多くないように感じました。土器より人骨の方が多いように見えます。それらの点で方針を統一する事が容易なのではないでしょうか。

出土品保管場所の倉庫の中はほとんど人骨でした。おびただしい量です。そのほとんどはシリコンゴムとFRP（ガ

石原 道知（武蔵野文化財修復研究所）



講義室風景

ラス纖維とプラスチック）で剥ぎ取った資料です。一件の「剥ぎ取る作業」に約30万円ほど材料費が必要だと聞きました。土器の取上げも同じようにしています。30万と聞くと大

変な額だと思いましたが、後世に正確な出土状況を伝えられることと、日本の場合取上げた立体ジグソーパズルを、全国の発掘補助員さんたちが苦労して行っていることを考えれば、どちらが良いかは軽々に判断できないなと思いました。それに加え私も「剥ぎ取り作業」を行いますが台湾の技術者は相当な高いレベルにあると思いました。あれだけ大量な「剥ぎ取り」をしていればいやでも技術力がアップしスピードも速く、コストも下がるのではないかでしょうか。

ただし、この「剥ぎ取り法」のマイナス面は大量なシリコンゴムとFRPの大量なゴミが出てしまう点です。合成樹脂の環境への負荷と人体への悪い影響を自身のニュースレター1999『文化財の造形保存Vol. 6』「合成樹脂の諸問題」で10年前から訴えている府中工房の堀江武史氏はその点を指摘していました。

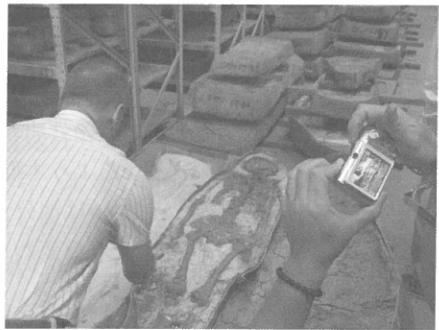
台湾の修復関係者からの質問

今回の講演では縄文土器のすばらしさを国外の人に訴えたいという望みを持って取り組みましたが、その点は多少なりとも伝わったように感じています。おそらく縄文土器の良さ、少なくとも私が縄文土器を愛していることは伝わったのでしょう。講演後若い人から質問を受けました。「どうして縄文土器が国宝？」です。私は、実用品に高い評価をあたえない西洋的な芸術感覚とは違う価値観が日本にはあること、中世では千利休が素朴な茶碗にこそ美を見出していた審美眼をもち、近世では柳宗悦の「用の美」のような価値観を日本人が持っていること、そのような思想がありつつ、なによりも焼き物が大好きな国民性があるからこそ、先史時代の素焼きの器である縄文土器にも国宝の称号を与えることができる民族である、と述べてきました。

ところが講演後のロビーでは、何人ぐらい土器修復家がいるのかと聞かれてはたと困りました。会場での質問では土器を国宝にする価値観を持つことができる高い思想を有する国民だと説明したばかりなのに、その土器（埋蔵文化財）専門の修復家は何人いるのか？ 私が知っているかぎ



ワークショップ、土器クリーニングについて説明



人骨剥ぎ取り後の状況



文化資産総管理處籌備處。1900年代前半の日本人による設計の建物で、こうした日本人設計の建物がけっこう保存されています。



台湾の廟絵画師、陳さんと交流しました

りでは10人程度で、その中で保存修復学会のような公の場で発表している人となると数人ではないかと。なんと少ない。

しかし全国の発掘現場の整理作業員、補助員さんたちが土器修復家ともなれば数千いや数万人規模で存在するのではないかとも思いました。その場では答えを濁し逃げました。私の考えでは埋蔵文化財修復家と発掘作業者の分かれ目は「自分の仕事を他者に伝えることができる」あるいは「伝えたことが有る」ことが重要なポイントを感じています。私も技術側の人間です。手作業のすべてを言語化することは不可能だと考えています。それでも概略だけでも記

録化し、他者の目に晒す行為が文化財の修復にはとても大事なことだと思います。理由は、自分を客観視することになるという点です。話すだけでもかなり自分を確認することになります。学会のような大きな場でなくとも数人の勉強会での発表でも十分で、さらに文章化し写真を添付、という行為をしていけば、第三者の目で自分の仕事を見られるようになります。要は発言することに意義があり、誰からも反応が無くてもこのことはとても自分を鍛えることになります。やはり残念ながらそのようなことを考えると、胸を張って土器修復家は数千人、と言えないなと思います。

全国の土器整理をしている方々にお願いですが「ここにこんな面白い土器があります」の声を上げてください。そんな声の上げ方でも修復家への道につながると思っています。最後に10年来の付き合いのように接してくださった通訳の林彦良さんにお礼申し上げます。

サテライト・レポート

■ 水中文化遺産W・G

平成20年12月14日～16日、九州長崎県松浦市鷹島と九州国立博物館において、水中文化遺産担当者協議会を開催いたしました。

同協議会は、松浦市教育委員会との共催で、文化庁と文化財保存修復学会の後援を受け、日本財団の助成により開催したもので、日本全国の市町村教育委員会、海事関係博物館から、約30名の方々に集まっていただきました。

協議会の趣旨は、海洋国でありながら未だ水中の文化遺産に关心の薄い日本の現状を改善するため、各地の文化財保護行政の先端で活躍している方々に参集していただき、互いに情報交換や協議を行うことにより、問題意識の共有化を図ることです。

また、会期中5名の講師を招き、それぞれのお立場から講演していただきました。

今回お招きした講師は、以下の通りです（ご発表順）。

12/14

講演1 『地方行政から見た水中文化遺産の保存と活用』

中田 敦之先生（松浦市教育委員会生涯学習課課長補佐）

12/15

報告『日本における水中文化遺産の現状と課題』

荒木 伸介先生（NPO JCP理事）

講演2 『いろは丸と地域活性化』

吉崎 伸先生（NPO法人水中考古学研究所理事長）

特別講演『韓國 水中文化遺産 発掘調査 紹介』

文 煥 哲先生（国立海洋遺物展示館・水中発掘課長）

講演3 『国連海洋法とユネスコ水中文化遺産保護条約』

小山 佳枝先生（中京大学総合政策学部准教授）

講演4 『文化財保護法における水中文化遺産の取り組み』

坂井 秀弥先生（文化庁記念物課主任文化財調査官）

各地の参加者からもひとりずつ事例報告をお願いし、短時間ではありましたがそれぞれ大変興味深い発表をして頂きました。

上記の報告書はただ今編集中です。会員の皆様へは、でき上がり次第お届けする予定です。

■ 関西支部

関西支部の事務局が変わります。

このたび関西支部事務所を、京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター歴史遺産研究部門内に移動します。事務局長は山岡寛氏に代わり、同大学准教授の伊達仁美先生に引き継がれます。関西方面における事業は、引き続き積極的に展開していきますので、今まで通りよろしくお願い申し上げます。

○ ちょっと ○ 服

表具師の佐藤隆明さんは、JCP事務所をよく訪ねてくださる会員のひとりです。

JCP本部事務所は女性スタッフが殆どのため、おいしいお茶菓子を持参してくださることもしばしば。いつも突然みえて、お茶を一服して帰っていきます。

そんなときには、日頃疑問に思っている今日の表具技術について、色々語ってくださいます。若い頃に師事した師匠や先輩は徐々にいなくなり、どんどん開発される便利なものに疑問を持つ人は少なくなり、学会や研究会に顔を出しても、いまひとつ現場と結びつく情報はなく……佐藤さんとお話ししていると、そんなジレンマをひしひしと感じます。

せっかくの問題意識なのだから、スタッフが聞いているだけでは勿体ない！

今回は、あえて佐藤さんの言葉をなるべくそのままに掲載しますので、皆様にもいっしょに聞いていただきたいと思います。読者の皆様の中で、佐藤さんに共感される方や、ご意見を持たれた方は是非事務局までご一報ください。

「木取りの話」

昭和——私の生きた時代は、科学の力に目を奪われ、先人の残した知恵を非科学的と切り捨てた時代だったと思う。最近そんな自分に罪悪感を持っている。当たり前のことで失笑を買うと思うが、私の周りでは技術以前のことが失われている現状を目にすることが多い。

子供の頃、「材料はこう使え」と親方に言われたことが、最近の人たちのやり方を見ていると、無くなっている。私の心の中では残念です。良し悪しは分かりませんが、皆様も考えてください。

菓子のバームクーヘンを思い浮かべて読んでください。木材を使う時は木表^{※1}、木裏^{※2}があり、表皮の付いている側が木表です。内側の中心に近い方を木裏と言います。

① 木の生長は春夏秋冬、季節で違う。

② 木目ではがれる箇所は冬期と春の成長期との境。

③ 木表の方が縮みが大きい。

④ 木は縦より幅が縮む。

すべての仕事はこれを念頭に置いて作ると聞きました。そうすれば

・木表から釘を打てば、割れが少ない。

・木目でポロリと剥がれ落ちることもない。

・組み物（仏像など）は木裏を内側に組む事で型崩れしない。

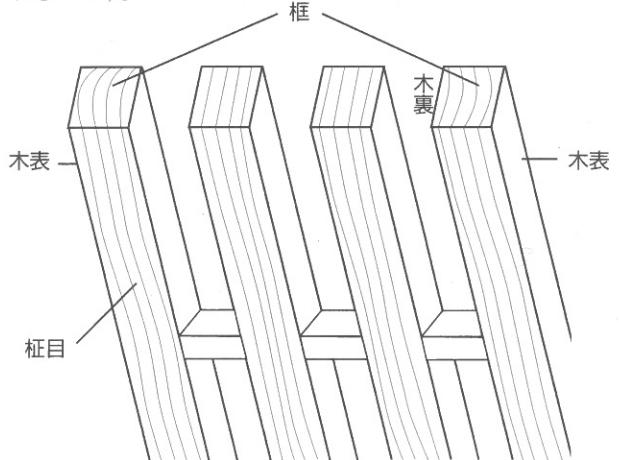
木表を表にすることで、トゲが出ないし剥がれない

という事になります。

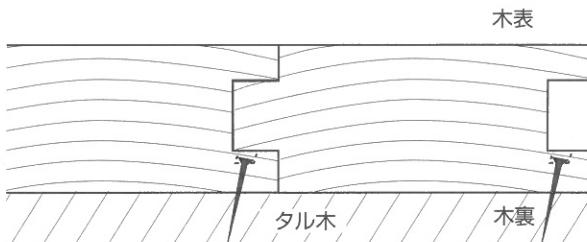
例)

・襖、額の骨組みは、框の側面が木表、正面が柾目^{※3}となるよう木取りします。

赤身^{※4}は油分が多くシミが出るので使いません（白身^{※5}でも色変わりすることがあります、ここでは触れません）。



・床板は、木表を表に使います。木表の方が縮むので、U字反りになっていくため、端を釘で止めます。



「ドーサ液」

テレビの絵画技法の番組で膠液に明礬を粒状で入れているのを見た。明礬と膠では溶ける温度が違うのに、これでよいのか？ 明礬は乳鉢で擂り、粉状にして高温で溶かす。膠はたんぱく質なので湯せんで70℃以下で溶かす。双方冷ましてから合わせると、塗ったとき光ることが少ない。

ドーサを引くのは10月～4月、最も良いのは11月～3月（の寒い時期）と言われて育った。昔（昭和頃）、妻屋膠^{※6}の瓶にもそのように書いてあったと記憶している。（暖かい季節に塗ったドーサは）明礬焼けやシミの原因ともなると思っているが、どうでしょうか？

※1 木表：板目の板の樹芯から遠いほうの面、樹皮に近いほうの面

※2 木裏：板目の板の樹芯に近いほうの面

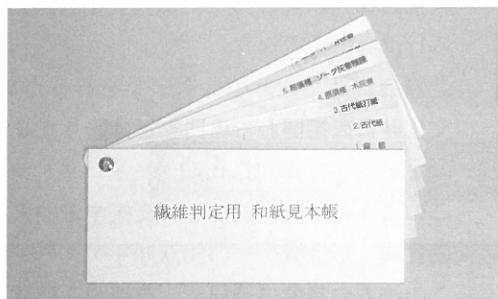
※3 柾目：幹の中心を通って縦断した面。またその材木。縦にまっすぐ通った木目のあるもの。←→板目

※4 赤身：木材の中心の、生活機能を失った帶紅色の部分。

※5 白身（白太）：樹木の材の周辺部を占める木質の柔らかい白みがかった部分。

※6 妻屋膠：妻屋膠研究所製膠

『纖維判定用 和紙見本帳』



紙の温度株式会社
URL <http://www.kaminoondo.co.jp/>
E-mail washi@kaminoondo.co.jp
5,250円 (190mm×80mm)

この『纖維判定用 和紙見本帳』は、21種類の和紙のサンプルとその紙の原料や漉き方が記載されている、コンパクトな見本帳です。

この見本帳の紹介文を読むと、「和紙を見て原料や漉き方を特定出来る人が少なく、またそれを特定するための比較基準となるものも全くありませんでした。この『和紙見本帳』は、原料の漉き方、乾燥方法などを明確にし、古くから使われている多くの紙と比較するための、21種類の和紙を再現しました。……」

見本帳のプロデュースは、紙纖維の分析者として信頼の厚い宍倉佐敏氏（特種製紙株式会社で紙の研究開発に携わ

り、定年後、紙の調査—纖維分析など一の研究所を開設している）がしています。対象者は紙の修復家、古文書、絵画、書家、保存科学の研究者、学芸員、司書の方々に非破壊で紙の判定を行えるための比較資料として作られたそうです。

確かに題名と内容を見ると、紙の専門家のための見本帳で、一般向きではないような感じがします。それが予想とは全く異なり、実際に見本帳をめくっていくとなかなか楽しいのです。

原料の違いで紙の風合いが違うことは予想がつきますが、原料が同じでも加工の違いによって、紙の表情や色味がだいぶ異なっていることは驚きだと思います。まずは見本帳の中で比較してみる。そして、身の回りにある和紙と比較していくと、面白さが増してくるかなあ。また、各紙の漉き方のデータと共にある短いコメントが、漉いた林伸次氏の苦労が伺えます。

1人の漉き手で水質が異なるように1ヵ所で多種類の紙を漉き、原料や漉き方が詳しく記載されているサンプルは今までありませんでした。紙の専門家の方々にはもちろんですが、そうではない方々にもお勧めです。

紙の種類は用途で選ぶことが多く、あまり加工まで考えることはしないと思います。少し視点を変えて、加工方法の違いでこんなにも違うのか、紙の奥深さを見つけてほしいです。

見て、触れて、嗅いで、書いてなど五感を利かせて紙を味わってみては如何でしょうか。

(K.M)

JCP事務局通信

■九州文化財保存支援機構国際交流基金

(愛称：とびうめファンド) のご案内

平成20年12月、九州・沖縄の文化財を守り伝えていくため、九州国立博物館、福岡県教育委員会、太宰府市、太宰府天満宮などが核となり、九州文化財国際交流基金が設立されました。(理事長：味酒安則太宰府天満宮禰宜・総務統括長・文化研究所主管)

事業の柱は

- ① 文化財を守り伝えるために必要な人材の育成
- ② 文化財の保存と修理
- ③ 1と2に関わる国際交流事業の実施

などへの助成です。

文化財の保護継承には資金が必要ですが、これまで文化財に関わるファンドは数少なく、こうした財團の設立が待望されていました。

1日でも早く、ひとりでも多くの方に知って頂きたく、ご案内申し上げます。

※JCPあるいは文化財保存修復学会会員の皆様へは、後日同ファンドからパンフレットが郵送される予定です。詳細はパンフレットをご高覧下さい。

とびうめファンド連絡先

〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目3-18-506
TEL : 092-924-3588 / FAX : 092-918-2829

■有限責任中間法人

文化財保存修復学会第31回大会 in 倉敷

○研究発表

日 程：2009年6月13日（土）／14日（日）
会 場：倉敷市芸文館

〒710-0046 岡山県倉敷市中央1-18-1

○懇親会

日 程：2009年6月13日（土）
会 場：倉敷アイビースクエア

○参加費・参加方法等お問い合わせ先：

第31回大会実行委員会事務局
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15
UEDAビル6F (株)クバプロ内
TEL : 03-3238-1689 FAX : 03-3238-1837
E-Mail : taikai31@kuba.jp
URL : <http://www.kuba.co.jp/taikai31/>

ご入会ありがとうございました。

(平成21年3月1日現在入会者数)

■理事	8名	■維持会員	9名
■登録会員	179名	■一般会員	87名
■学生会員	30名		
■監事	1名		
■専門評価委員	1名		
■評議員	1名		
■賛助会員	31件		
株式会社	宇佐美松鶴堂		
株式会社	宇佐美修徳堂		
株式会社	岡墨光堂		
株式会社	桂文化財修理工房		
財団法人	元興寺文化財研究所		
京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター		
株式会社	京都科学		
共同精版印刷株式会社			
共和コンクリート工業株式会社			
國富株式会社	長崎営業所		
株式会社	芸匠		
株式会社	光影堂		
有限責任中間法人	国宝修理装こう師連盟		
株式会社	坂田墨珠堂		
株式会社	修美		
宗教法人	正法院		
株式会社	東都文化財保存研究所		
日本通運株式会社	美術品事業部		
株式会社	半田九清堂		
長谷川	聰		
百元	節		
株式会社	富士海洋土木		
株式会社	フレンドトラベル		
有限会社	文化財修復技術研究所		
株式会社	文化財保存		
溝川商店			
山領絵画修復工房			
個人4名			
(アイウエオ順)			

NPO JCPの活動に 参加してみませんか？

■登録会員：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■賛助会員：年会費 一口50,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費 3,000円

大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典

・季刊情報誌の送付

・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-6770-1682 FAX. 03-6770-1683

E-mail : jimukyoku@jcpnpo.org

URL : www.jcpnpo.org

※この他にも、隨時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

・三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店

普通預金 3960340

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第19号

2009年3月30日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号

TEL : 03-6770-1682 FAX : 03-6770-1683

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学

日本庭園・歴史遺産研究センター内

〈理事〉

三輪 嘉六（理事長）

大林 賢太郎（副理事長） 西浦 忠輝（副理事長）

伊原 恵司 白井 久明 増澤 文武

荒木 伸介 澤田 正昭

〈本部事務局〉

八木 三香（事務局長） 松本 洋子

千葉 麻由子 小川 純子

〈関西支部事務局〉

伊達 仁美（事務局長） 加藤 亜沙子

〈編集協力〉

嶋根 隆一（伝世舎）